「今日の説教、聴き手のために」　2013/2/10　明治学院教会(303)

(このプリントは毎週作っているものです)　牧師　岩井健作

「後を振り返ってはいけない」

創世記 19 章 15 節―25 節、フィリピ 3 章 12 節―14 節。

選句「命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。」(17)

1、聖書には「後ろをふり向くな」という戒めがいくつかある。「鋤に手をかけてから後を顧みる者は、神の国にふさわしくない」(ルカ9:52)というイエスの言葉をまず思い起こす。「イエスに従う」と言ったのに、親の葬式を済ませてから、家族にいとまごいを言ってから、と言った弟子たちに言われた言葉である。ここでは「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのこのはみな加えて与えられる」(マタイ 6:33)というイエスの言葉が同時に思い出される。「加えて与えられるもの(対象化、相対化できるもの、絶対化してはならぬもの)」と「なくてはならぬもの(命、関係、恵)」との区別をしっかりわきまえなければならない。「なくてならぬもの(新共同訳では「必要なもの」)とは、マルタとマリヤの話(ルカ10:42)に出てくる言葉である。聖書の価値観から言えば「お金」か「いのち」かという問の前では、「いのち」を凝視して、「経済」「体裁」「しきたり」「思い患い」のことなどにキョロキョロするな、ということであろう。「いのち」は即「神の国、神の義」である。

2、パウロはキョロキョロしない。「後ろのものを忘れ、前のものに全身をむけつつ、神がキリスト・イエスによって上に召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」(フィリピ3:13-14)ときっぱりと言う。重心が前にかかっている走る姿勢では、後ろのものを考えている暇はない。パウロおよびその影響下の文書には、信仰の姿を「走る」ことで表現している箇所が多々ある(Ⅰコリ9:24,ガラ2:2,フィリ 2:16,Ⅱテモ4:7)。後ろのものへの思いは神によって相対化され、過去として締めくくられるから課題が前に置かれるからである。マラソンの走者のようである。パウロにとっては「神の義」は、何よりも大事な「賞」であった。

3、「後ろを振り返ってはいけない」という事で、最も有名な物語は創世記の「ロトの妻の物語」である。低地のソドムとゴモラを振り返るような人の姿に似た奇岩があることに由来する原因譚の物語だ、と研究者は解説する。創世記の編者が「アブラハムの信仰」を語る族長物語の一環に入れたのは、財産や持ち物、そして名誉地位などのキョロキョロするイスラエル民族の多くの人の歩みに一石を投じるためだったのではないか。いつの時代に読んでも、絶対化してはならないものにしがみつき、託された可能性や招来を見失うことへの警鐘を感じる。与えられている周りの人との関係の豊かさや役割に気付かない生き方への戒めを覚える。「関係存在としての人間」を忘れていることへの戒めをこの物語はもつ。関係には「生きた関係」と「死んだ関係」がある。ふと過去に執着を起こし「死んだ関係」に墜ちこんだのが「ロトの妻」であった。

作家の森礼子さんが「愛のありか」という短編で、ロトの妻の家庭的な情の深さ、人間的暖かさを見ている。だが、それが築いてきた家への愛着に思わず振り返ってしまった、という。そして「瀬戸際に立ったとき、他の一切のものをすてて命を救う決断が必要である。この当然のことが、意外に人間にはでき難いものである」と述べている。人生の要所、要所で、信仰の決断の人でありたい。決断に弱い自分であっても、そのように導かれるようにと、日頃の祈りを重ねたい。